

「TOMODACHI アフラック プログラム」 第3回目 (2015年) の派遣医師を募集 ～ 小児がん研究に携わる医師の米国留学助成制度 ～

アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社、日本における代表者・社長:外池 徹)は、日米交流事業「TOMODACHIイニシアチブ」(<http://usjapantomodachi.org>)の一環として2013年から展開している米国留学助成制度「TOMODACHIアフラック プログラム」における第3回目(2015年)の米国への派遣医師を募集します。なお、第2回目(2014年)で選出された北海道大学病院(小児がん拠点病院)で小児科特任助教を務める大島淳二郎氏は、2014年8月から米国ジョージア州の「アフラックがん・血液病センター」に派遣されており、今回の派遣期間は2015年8月から6ヵ月間の予定です。

本プログラムの概要及び募集要領は、以下のとおりです。(大島医師の活動レポート等は別紙参照)

◆<TOMODACHI アフラック プログラム>概要・募集要領

【TOMODACHI イニシアチブとは?】

米国政府・米日カウンシルの主導のもと、東日本大震災後の復興を支援するとともに、長期にわたり日米間の文化的・経済的な結び付きを強化し、友好を深めるかたちで投資を行う官民によるパートナーシップ。

夢を持ち、その実現に向け計画を立て実行する日米の将来の世代、すなわち互いの文化や国を理解し、成功と社会への貢献に必要な世界中で通用する技能と国際的な視点を備え、日米関係の将来に深く関わる「TOMODACHI 世代」の育成を目指しています。

【TOMODACHI アフラック プログラム】

目的	米国における最先端の小児がん研究の経験を通じ、日本での治療・研究に役立てる
対象者	小児がんの基礎、診断、治療等の研究に携わる日本在住の医師 (40歳未満)
概要	「アフラックがん・血液病センター」(米国ジョージア州アトランタ)に、日本在住の医師を1名、原則6ヵ月間派遣し、留学費用200万円を支給する(宿舍などに関する費用は別途支給)
応募受付	2014年12月1日(月)～2015年1月31日(土)
派遣期間	2015年8月～2016年1月予定(原則6ヵ月)

※ 派遣医師の選考については、「日本小児血液・がん学会」の協力のもと、「TOMODACHI アフラック プログラム」選考委員会(委員長:日本小児血液・がん学会理事長 堀部敬三氏)で行います。

選考に関するお問い合わせ

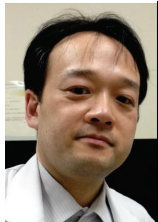
【事務局】認定NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-32 目白セクエンツァF
月曜～金曜 10:00～16:00 TEL: 03-3952-2640

※応募要項・応募用紙はゴールドリボン・ネットワークホームページからダウンロード可能です。

当社は米国に本社を置く企業として、今後も日米両国に資するCSV*経営に努めてまいります。

「TOMODACHI アフラック プログラム」活動レポート（2014年）

◆大島淳二郎氏 略歴



北海道大学病院小児科特任助教。1999年3月に北海道大学医学部卒業。北海道大学附属病院、社会事業協会帯広病院、日鋼記念病院などの各小児科に勤務し、2006～2009年、埼玉県立がんセンター臨床腫瘍研究所にて胎児性腫瘍の原因遺伝子やエピジェネティック異常と予後に関する研究に従事。2009年4月より北海道大学病院小児科医員。2013年5月より現職。

【TOMODACHI プログラムに参加して感じたこと】

2014年7月にアトランタに移住し、TOMODACHI プログラムが始まって約2ヶ月が経ちました。Children's Healthcare of Atlanta の小児血液腫瘍チームには50名以上の医師が研究・臨床に励んでおり、これまでに、関連病院である Scottish Rite Hospital, Egleston's Hospital の2病院で研修神経腫瘍外来、長期フォローアップ外来、造血幹細胞移植ユニットなどをローテートしながら、大変多くのことを学ばせていただきました。

こちらでは多様な専門職が非常に効率的に機能していますし、毎日のように行われる症例検討のカンファレンスや特別講義、報告会などのカンファレンスではとても率直な意見交換がなされます。Fellow や Resident などの若い医師たちも向学心に富み、日々の診療のほか Tumor Board や学術的なプレゼンテーションなど、想像を越えるほどの多くの仕事を精力的にこなしています。社会的背景の違いもありますが、初発の急性リンパ性白血病は入院治療が寛解導入の最初の数日のみだったり、造血幹細胞移植も順調であれば2～3週間で退院など、目からウロコが落ちることもしばしばです。



一方で、闘病する子どもたちやご家族の想い・医療スタッフの志は、日本と変わらないと感じました。残り4ヶ月ですが、さらに多くのことを経験させていただき、より良い形で還元したいと思っています。

【今後参加される方へのメッセージ】



日本での多忙な日々を離れて留学に出る事には、家族や同僚など、まわりの理解や協力が不可欠ですし、多くのハードルがあるかも知れません。とはいえこのプログラムは若い小児科医師が米国の臨床を知り視野を拓けるための絶好の機会であると思います。興味がある方はぜひ、挑戦してみてください。